

中国近世戯曲小説中の異体字研究 (4)

——『大唐三蔵取経記』——

附論：「新雕大唐三蔵法師取経記」と「大唐三蔵取経詩話」 の先後問題について

福 満 正 博

1. 「新雕大唐三蔵法師取経記」と「大唐三蔵取経詩話」の先後関係について

1.1. はじめに

私は、ずいぶん昔に必要な迫られて「大唐三蔵取経詩話」の校本を読んだことがある。その時は特になにも思わなかった。今回異体字・俗字の研究を目的として、じっくりと二種の「三蔵取経」の刊本を読み比べてみた。そうすると、本来の目的とは別に、従来指摘されていない発見もあったので、附論として付すことにした。ただし、附論と言っても、異体字表の後ろに付けたのでは、あまり目立たないので、最初の方に持ってきて、二種の刊本の先後関係について、論ずることにした。

まず、手前味噌で申し訳ないが、俗字の認識がいかに近世文学研究にとって重要かという例を挙げさせてもらいたい。『大唐三蔵取経詩話校注』（中華書局、1997 年）は、中国で最近に出た校注本である。比較的詳細な注と解説を施し、優れた研究書である。しかしこの本の校訂による本文では、次のようなものがある。

猴行者曰「我師不用驚惶。國名蛇子，有此衆蛇[●]，大小差殊，且縁皆有佛性，逢人不傷，見人不害」（10 頁，「入香山寺第四」）

この文にはなにも問題がなさそうであるが、実は「[●]蛇

僧行前去，沐浴殷勤。店舍稀疏，荒郊止宿。𪚩有虎狼蟲獸，見人全不傷殘。(27 頁)

一行は旅を進めて、身を清めた。店は近くに見当たらなかったの、荒野で寝た。虎や狼やいろんな獣がいたが、人を傷つけようとはしなかった。とでも訳しておく。そうすると「𪚩」の字は、楷書体の「雖」の異体字だということがわかるはずである。そうだとすれば、先の「𪚩」も同じではなかろうかということが推測できるはずである。先の文をもう一度書き直すと、次のようになる。

猴行者曰「我師不用驚惶。國名蛇子，有此衆蛇。雖(𪚩)大小差殊，且緣皆有佛性，逢人不傷，見人不害。

つまり、「猴行者が三蔵にこう言った。お師匠様、驚かれるには及びません。国名が「蛇」を名のっておりますから、こんなにたくさんの蛇がおります。これらは、大（きくて怖いもの）小（小さくて可愛いもの）いろいろありますが、しかしみな仏性を持っておりますゆえ、人を傷つけたり害したりはいたしません」というように、訳せるはずである。実際に「新雕大唐三蔵法師取経記」でも、この字は「𪚩(雖)」になっている。なぜ中華書局本が、このような校正をしたのか、不思議である。やはり、本文を正確に読むためには、俗字・異体字を正確につかむことが重要だということをしめしていると思われる例である。

またついでに校本について気がついたことを述べれば、次の個所を挙げたい。

舉頭遙望，萬丈石壁之中，有數株桃樹。森森聳翠，上接晴天，枝葉晟濃，下浸池水。（「入王母池之處第十一」）

校本では、「晟濃」の部分を「茂濃」に改めている。字形の類似による誤りとするのだろうか。しかし「晟」の字は、『正字通』に「日光充盛，又熾也，古通借盛」とあるので、「晟」のままでも構わないと思われる。どうしても校正するなら「茂」よりも「盛」の方がよいように思われる。「盛濃」の方が、歴史的に用例もずっと多いようである。他にも1997年の中華書局版には、抜けている字とかいろいろな誤りが見られるが、この辺で止める。

さて、本研究は本来、三蔵取経物語の二種類の刊本の異体字・俗字を集めて、その字形と所在を明らかにするのが目的であった。三蔵取経物語の二種類の刊本というのは、「新雕大唐三蔵法師取経記」と「大唐三蔵取経詩話」である。両者は元々日本の高山寺に蔵されていたもので、内容は基本的に同じである。「新雕大唐三蔵法師取経記」は大字本ともよばれ現在お茶の

水図書館に蔵され、「大唐三蔵取経詩話」は小字本とも呼ばれ大倉文化財団に蔵されている。両者とも破損しているが、「大唐三蔵取経詩話」はほぼ完本に近いのに対して、「新雕大唐三蔵法師取経記」はその半分ほどしか残存していない。2種の刊本の詳細な書誌的な事柄については、太田辰夫氏や、磯部彰氏に多くの研究がある。特に磯部2007では、詳細に述べられている。したがって、ここで繰り返したりはしない。実際、今回の私の研究も、これらの研究に多く拠っている。

1.2. 三蔵物語の元型

「新雕大唐三蔵法師取経記」と「大唐三蔵取経詩話」のもととなった元型の物語を呼ぶ呼称として『元「三蔵取経」』という名称を使うことにしたい。今回、二種の刊本を比較しながら、元「三蔵取経」について考えてみると、この作品は相当に古い文学形式を残存させていることがよくわかる。例えば、第九の鬼子母国の場面で、国王にいろいろお世話になって出発する場面で、次のようにある。

国王曰、「前程安穩、回日祇備茶湯」。法師七人大生慙愧、乃留詩、……

三蔵たち一行は大いに「慙愧」するというのであるが、これが唐代の代表的な白話語彙である。現代の「恥じる」とか、「恐縮する」とかいう意味ではない。当時は普通に感謝するという意味に用いられていたのである。この語については早くに張相氏が『詩詞曲語辞匯釈』（中華書局、1953年）に用例が集めているので、説明するまでもないだろう。最近では、先に挙げた『大唐三蔵取経詩話校注』が、唐代の変文中の語彙と共通するものを多く指摘してくれているので、非常に参考になる。元「三蔵取経」は、語彙としてもかなり古いものを残していることが、理解できる。

形式の面から見てみると、元「三蔵取経」は、各回の名称が「…処第○」となっているところが特徴的である。この「処」という言葉が、変文を連想させるのである。変文では多く、「…処、若為陳説」という言葉がつかわれる。変文では、あれこれ散文で話を説明した後、「…という場面であります、それがどのようなであったかと申しますと」とつなげて、以下韻文が続く形式がよく見られるのである。例えば、P 2553「王昭君変文」の例を挙げてみたい。王昭君が重病で死ぬ場面で次のようになる⁽¹⁾。

恰到三更、大命方尽。单于脱却、天子之服、還着庶人之裳。披髮臨喪、魁渠並至。曉夜不離喪側、部落豈敢東西。無由暫輟、慟悲切調、乃哭明妃処、若為陳説。

昭君昨夜子時亡、突厥今朝發使忙。
三片走馬傳胡命、万里飛書奏漢王。

.....

(ちょうど三更の頃、命はつきました。単于は天使の服を脱ぎ、庶民の服を着て、髪をほ
どいて葬式に臨みます。頭目たちも出席して、皆片時もそばを離れません。部落の者たち
も付き添います。皆いつまでも泣き声を挙げてやまず、ひどく悲しみました。王昭君の哭
葬の場面、いかなる様子かと申しますと。

王昭君は子の刻に亡くなり、
次の日の朝、突厥は急いで使者を出した。
南に北にと各地に伝令を走らせ、
遙か東の漢王にも使者を送り昭君の死を知らせました。……)

というようである。日本語で訳してしまうと前半の散文と後半の韻文との違いが分かりにくい
が、後半の部分の句末に黒点で示したように「亡」と「王」で韻を踏んでいることは、見て取
れることと思われる。この散文から、韻文に移行する処で、「処」という言葉が典型的に用い
られるのである。P 2553「王昭君変文」が本当に語り物を語る語り物の芸人の原稿であった
かどうかなどの問題は別にして、このような形式の語り物が当時広く存在していたことは間違
いのないことであろう。しかしこれも、元「三蔵取経」の各節の題名に使われる「処」という
字が、此れを連想させるということだけに過ぎなかった。それ以上の密接な関係を示す証拠と
呼べるものではなかった。それでは、唐代や宋代の語り物と、元「三蔵取経」との関係を示す
ものは、他にないのであろうか。

先ほど述べた語彙の面からもそうであるが、両者の関係を明確に示す場所が無いわけではな
いのである。それは「入優鉢羅國処第十四」である。三蔵一行が優鉢羅國に入ると、景色の美
しい地域であった。ここはどこかと尋ねる三蔵に、猴行者はいろいろと説明する場面で、猴行
者は歌いだしているのである。ここは、今まで出版された校本では散文のように文を続けたま
まであるので、なかなか気づきにくいところではある。それを引用すると次の様である。

佛天無四季、紅日不沈西。
孩童顔不老、人死也無悲。
寿年千二百飯長一十圍。
有人到此景百世善緣婦。

來時二十歲	婦時歲不知。
祖宗数十代	眷族不追隨。
桑田變作海	山岳却成溪。
佛天住一日	千日有誰知。
我師詣竺國	前路只些兒。

五字の齊言体である。「西」「悲」「圍」「婦」「知」「隨」「溪」「知」「兒」で韻を踏んでいる。「悲」「圍」「婦」「知」「隨」「兒」は、止摂の韻である。「西」と「溪」は、蟹摂4等齊韻である。止摂と蟹摂が韻を踏むのは、おかしいようにも見えるが、実はこの止摂と蟹摂齊韻が韻を踏むことが唐末から五代にかけての西北地方の敦煌変文によく見られることは、邵榮芬 1963、周大璞 1979、張金泉 1981、都興宙 1985 などに指摘されている。また「慧林一切經音義」などに示される唐代長安音（河野六郎 1956、三根谷徹 1976、羅常培 1933、高田時雄 1988 参照）より後の、周祖謨 1942 が示した宋代の洛陽開封音系の特徴にも挙げられている。止摂と蟹摂齊韻が韻を踏むのは、このような事実とよく符号する。ともかく元「三蔵取經」には、語り物の痕跡が、作品内部に残っているのである。

1.3. 先後関係の検討

さてこのような前提でもう一度、「新雕大唐三蔵法師取經記」と「大唐三蔵取經詩話」という二種の刊本の先後問題を検討して見たい。二種の刊本については、従来二つの説があった。一つは、長沢規矩也 1939 の「新雕大唐三蔵法師取經記」が早いとする、「大唐三蔵法師取經記」と「大唐三蔵取經詩話」である。二種の刊本の字句の異同を検討して、「新雕大唐三蔵法師取經記」の方が正しいものが多いから、早く出たはずだというものである。もう一つは、太田辰夫 1966 の「大唐三蔵取經詩話」の方が早いとする、『「大唐三蔵取經詩話」考』である。太田氏の言葉によれば、「誤りの多少を刊行の前後におきかえることはできない。重要なのは誤刻の量ではなく、質である。『取經記』で正しくなっているのは、前後の文脈からわかりきったことが多い。これに対して『詞話』で正しくなっているものには文脈からは推測できない特殊な語がある。…」太田氏は仏教語などの専門語で、「大唐三蔵取經詩話」の方が正しいものが多いことを理由に、『大唐三蔵取經詩話』の方が早いとするのである。はたして公正に見て、どちらが正しいのであろうか。

今回私なりに、主要な目的ではなかったが、二種の刊本の字句の異同を比較して見て、気がついたことがあった。それは、幾つか不可逆的な字句の異同があるということである。一つはリズムの問題であり、もう一つは字体の問題である。

まず、リズムの問題から取り上げてみる。変文などの文体でよく見られる例であるが、散文の部分と言っても、全くの散文ではない場合が多い。先ほど引用したP 2553「王昭君変文」の場合を見ても、散文部分は韻こそ踏まないものの、4字と6字の繰り返すリズムを形成していることに気づくはずである。さて元「三蔵取経」の「入竺國度海之处第十五」は、まさにこの四字と六字のリズムが、ずっと繰り返される部分なのである。この辺も、語り物との関係を窺わず古い痕跡を残す部分でもある。その一部を引用して見る。見やすくするために、一句ごとに、横に並べてみる。

此去溪千里、
過溪至山、
五百余里。
溪水番浪、
波瀾滿重。
山頂一門、
乃是佛居之所。
山下(一)千余里
方到石壁、
次達此間。

括弧の中の「一」が有るのが「新雕大唐三蔵法師取経記」で、無いのが「大唐三蔵取経詩話」である。文意、理屈から言えば、「一」は、有っても無くてもどちらでも構わないものである。しかし文章にはリズムを重視するものがあって、口頭伝承性が強い語り物などは、特にそうだと考えられる。そうするならばこの場合、「一」がある方が、リズムも整い、旧来の姿を残していると考えられる。本来「一」は無かったのであるが、後から刊行した「新雕大唐三蔵法師取経記」が、リズムを整えるために、新しくここに「一」を加えたとは考えにくい。後から刊行した「大唐三蔵取経詩話」が、意味的には有っても無くてもかまわない「一」を、落としてしまったとしか考えられない。この回にはほかにも同様の例がある。

次の例は、最後の「到陝西王長者妻殺兒处乃十七」からである。王長者の妻の孟氏が、侍女の春柳と企んで長男の痴那を楼から川に突き落として殺害したすぐ後の場面である。

孟氏一見、便云「此回死了」。方始下楼、忽見門外有青衣走報、長者(回帰。長者)在路中、早見人説癡那落水了、行行啼哭、才入到門、拳身自撲。

括弧の中が無いのが「大唐三蔵取経詩話」、有るのが「新雕大唐三蔵法師取経記」である。括弧の中が無い理由は明確である。最初の「長者」と二番目の「長者」を見誤って、最初の「長者」の次に、二番目の「長者」の続きの文を続けてしまったのである。つまり、「大唐三蔵取経詩話」が、元「三蔵取経」のこの部分を落としてしまったとしか考えられない。その逆は、考えられない。「新雕大唐三蔵法師取経記」は、元「三蔵取経」のこの部分を忠実に伝えている。もう少し後ろの方には、同じような原因であるが、逆に「迎接」の二字を、誤って付けている例が、「大唐三蔵取経詩話」にある。しかしこれ以上説明しても長くなるので省略する。

以上が、二種の刊本、特に字句の異同を中心に見てきた場合の代表的な例である。これらは、片方が見落としたともいえるし、また逆にもう一方が付け加えたともいえる、簡単な字句の異同とは異なる。そのような意味で不可逆的な字句の異同と言える。

どちらの場合も、「新雕大唐三蔵法師取経記」が先で、「大唐三蔵取経詩話」が後であるということである。もちろん先とか後とか言っても、長沢氏も太田氏も注意しているが、直接の先後関係とは限らないということである。もっと版本の先の世代とか、後ろの世代とかいうような意味である。というのは元「三蔵取経」は、日本に偶然残存する二種類の版本しかなかったとは、考えられないからである。恐らく亡失した多数の版本があったはずである。

1.4. 異体字から見た先後関係

この問題に関して最後に、本研究の成果である、異体字・俗字の方面から、考究してみたい。二種類の刊本の異体字・俗字の字形と場所を示したのが、後ろの表である。この表は、異体字・俗字の種類を示したものであるから、実際の出現数を示したものではない。そうではあるが、両者を比較してみると、「取経記」に特徴的なものは121種、「取経詩話」に特徴的なものは183種、両者に共通なものは139種であった。一見「取経詩話」の方が多そうであるが、実際はそうではない。作品の残存している量としては、「大唐三蔵取経詩話」の方が二倍ぐらいあるのである。ということは、「新雕大唐三蔵法師取経記」の方がずっと頻度としても多いということになる。それは実際に両者を読み比べてみれば、すぐに実感する所である。

「新雕大唐三蔵法師取経記」は、字そのものは美しいのであるが、字体としては草書体などの異体字が多いのである。逆に、「大唐三蔵取経詩話」は一見拙い字体のように見えるが、実際には正確な楷書体で書かれていることも少なくない。「躊躇」という言葉は双声で、「躊躇」と同じような意味である。「大唐三蔵取経詩話」の上巻の十三葉の裏の三行目に、この複雑な字形の字が出てくるが、巾箱本という小さな本で、宋代という時代の印刷技術も考慮してみると、学術的な評価ではないが、その正確な出来ばえに感心してしまうと言わざるを得ない。これだけではない。中巻の「入九龍池処七」の初めに出てくる「𪔐」「𪔑」などの字を見ていると、

篆書体に似た字にも見える。

ものすごく大まかな言い方であるが、「新雕大唐三蔵法師取経記」は、異体字・俗字の方に重きがあるのに対して、「大唐三蔵取経詩話」はずっと楷書体の方へ傾斜していえるように思われる。元「三蔵取経」が、これまで見てきたように、語り物と関係を有していたとしたならば、その初期の版は、相当に異体字・俗字だらけのものであったと思われるのである。それは、唐代の語り物である敦煌の変文などを見ても、わかることである。その元「三蔵取経」が、何度か版を重ね、「新雕大唐三蔵法師取経記」に至り、それからまた「大唐三蔵取経詩話」に向かっていくにつれて、少しずつ字体としては楷書化していったものと思われる。テキストとしては、より卑俗なものからだんだんと典雅なものへと移行していく、その途中の二つの段階として、「新雕大唐三蔵法師取経記」と「大唐三蔵取経詩話」はあるのだろう。「大唐三蔵取経詩話」の巻末の刊記には「中瓦子張字印」とあり、南宋の杭州（浙江省）で発行されたとされている。ただし、両者は時間的にあまり離れていなかったのもので、本文の字句そのものの異同はほとんど見られないということではなかろうか。

テキストが、このように雅に向かって動くというようなことは、他にあるのだろうか。我々は、元雜劇の例を挙げることができる。例えば、最古の雜劇のテキストである元刊本は、異体字・俗字に満ちたテキストである。それが、脈望館などのテキストを経て、最終的に臧晋叔（浙江長興人、万暦八年進士）の『元曲選』のテキストへと到着する。臧晋叔の校訂を経た元曲のテキストは、楷書体にとどまらない古めかしい字体も多く含まれている。例えば、「竇娥冤」では、「角」「酒」の字が篆書体となっている。北方起源の雜劇が、江南の文人により、典雅なテキストに整えられるのである。『元曲選』は、元曲のテキストの最終形態と言えるかもしれない。「新雕大唐三蔵法師取経記」と「大唐三蔵取経詩話」も、このようなテキストの動きの先がけであったのではなかろうか。だから、「大唐三蔵取経詩話」の最後にある刊記「中瓦子張字印」というのも、この雅への動き・権威化への動きの一つとしてとらえることができるだろう。

また言語的な観点から見てみると、かつて有坂秀世 1944 は、「宋末及び元代の頃、支那語の韻尾 m, n, ng 三種は、北方の標準語では昔のまま明確に区別されていたのであるが、呉語では早くから混同が起っていた。臻・深・梗・曾四摂は、臨安地方では既に現代杭州音と同じく n 尾のみに帰一していたのではないかと思われる。大唐三蔵取経詩話は、宋の臨安府中瓦子の張家の印行するところであるが、その中の詩では人（真）尋（侵）経（青）相韻し、経（青）、程（清）、膺（蒸）身（真）津（真）経（程）呈（清）相韻した例がある。……これに反して臻・深・梗・曾四摂の通用の例は甚だ多い」と述べている。またこれを受けて太田辰夫 1957 は、「大唐取経詩話」の項の解説で、「本書におさめられた詩の押韻を調べてみると、人・

尋・経のごとく臻摂・深摂・梗摂を押通し、また程・膺・身・津・経・呈のごとく梗摂・曾摂・臻摂を押通し、林・聴・程・庭のごとく深摂・梗摂押通している。……これはおそらく江南音を反映しているもので、南宋の頃臻・深・梗・曾の四摂がn韻尾に帰一していたらしいことは宋词その他にも例証がある。本書がその文体の古さにもかかわらず南宋のものと推定される理由はここにある」とのべた。これらは、元「三蔵取経」を、その音声的な特徴から、江南地方と結びつけようというものである。

これについて検討してみる。中古の切韻音系から唐代長安音を経て、元代の中原音韻へとたどる中国語の歴史的音韻変化として、韻母に限って言えば、一等重韻の合流、二等重韻の合流、江摂と宕摂の合流、元韻と山摂の合流などなど数々挙げられる。その中で、梗摂と曾摂の合流も挙げられる。曾摂と梗摂の通押は、中国語の一般的な歴史的変化の中の一コマともいえる。張金泉 1981 は、敦煌曲子詞がそうであることを指摘している。また、臻摂や深摂との通押は、先に挙げた邵榮芬 1963 にもそのような例があることが指摘されている。中原音系（寧繼福 1985）ではこれら四摂の後身である真文韻庚青韻侵尋韻の主母音は、全く同じになる。この時代に、指摘される四摂が通押しても、それほど不思議な現象ではない。またほかに中原音系への移行の重要な項目として、蟹摂の齊韻灰韻と止摂の合流もあった。止摂の支韻脂韻之韻微韻の四韻と、蟹摂の齊韻灰韻の二韻が合流して中原音系の支思・齊微韻となるのである。周祖謨 1942 は、これが宋代に始まるとする。先に 1.2 の最後に引用した第十四の詩の通押でみたところ、この現象が元「三蔵取経」にも現われているのである。

このように見てくると、元「三蔵取経」の音韻的な基礎地域を明確に示すほど十分な証拠は挙げられないが、それでも中国の西北地域から洛陽開封の中原地域までの広い北方官話方言区域と考えても、それほど無理なことではない。それに対して、有坂氏太田氏のように元「三蔵取経」を無理に呉語と関連付けるには、その十分な根拠はないということが理解できるだろう。つまり元「三蔵取経」の段階で、テキストの内部的証拠として、江南地方との強い関係を示す証拠は、今のところ何も無いと言わざるを得ない。

最後に、この附論の部分をまとめる。附論では、次のことを検討した。宋代の刊行として知られる三蔵取経の話には、「新雕大唐三蔵法師取経記」と「大唐三蔵取経詩話」の二つの刊本が現存している。本稿では、刊本の異体字・俗字を検討することが目的であったが、詳細な比較をしたところ、二種類の刊本について、どちらが古くて、どちらが新しいかという先後問題に、ある程度めどを立てることができた。具体的には、両者の字句の異同、字体の比較などから見て、「新雕大唐三蔵法師取経記」の方が、直接の関係で無いとしても、先に位置する刊本であると推測した。

〈注〉

(1) 原文 p 2553 は、以下の通り。

不風燭故知生有地死有哀
伶至三更天命方盡
脫却天子之服還着庶人之衣
披毼隨官魁渠並至驍
不離官側部落豈敢東西日夜
哀無由盡極傷悲切調乃
哭明妃家若為陳說
單昨夜子時亡
突厥今朝使忙
三邊走馬傳胡命
萬里非書奏漢王
單于是月親臨哭
英槍須臾守青

校訂は、拙稿「唐代の語り物」(『山梨県立女子短期大学紀要』28号, 1995)の該当部分を参照されたい。

参考文献

- 有坂秀世「後記」1944年、『国語音韻史の研究』(1957年, 三省堂)所収
磯部 彰『「西遊記」資料の研究』2007年, 東北大学出版会
太田辰夫『中国歴代口語文』1957年, 江南書院
『「大唐三蔵取経詩話」考』1966年, 『神戸外大論叢』17-1・2・3合併号
『西遊記の研究』1984年, 研文出版
河野六郎「朝鮮漢字音の研究」1956年, 『河野六郎著作集』第2巻, 平凡社
高田時雄「敦煌資料による中国語史の研究」1988年, 創文社
長沢規矩也「大唐三蔵取経記と大唐三蔵取経詩話」1939年, 『書誌学』第十三巻第六号
羅 常培『唐五代西北方音』1933年, 国立中央研究院歴史語言研究所
三根谷徹「唐代の標準語音について」1976年, 『東洋学報』第57巻1・2号

- 周 祖謨「宋代汴洛語音考」1942年、『問學集』所収
邵 榮芬「敦煌俗文学中の別字異文和唐五代西北方音」、『中国語文』1963年第3期
周 大璞「『敦煌變文』用韻考」、『武漢大學學報』1979年3・4・5期
張 金泉「敦煌曲子詞用韻考」、『杭州大學學報』1981年11卷3期
「唐民間詩韻」1983年、『全國敦煌學術討論會文集』1987年，甘肅人民出版社
都 興宙「敦煌變文韻部研究」、『敦煌學輯刊』1985年第一期
寧 繼福『中原音韻表稿』1985年，吉林文史出版社

2. 中国近世戯曲小説中の異体字研究（4）——『大唐三蔵取経記』——

「新雕大唐三蔵法師取経記」の底本は、羅振玉が影印した『吉石齋叢書』所収のものを用いた。「大唐三蔵取経詩話」については、磯部彰氏の及古書院『大蔵財団蔵，宋版，大唐三蔵取経詩話』（1997年）を用いた。この本の影印は、非常に精緻なものであり、これによって相当程度ははっきりと大蔵財団蔵本の「大唐三蔵取経詩話」の原文をうかがうことができるようになった。おかげで、私の異体字・俗字研究にとって一つ確実な材料を提供してもらうこととなった。本当に感謝しなければならない。

さて本研究に当たり、両方の本の異体字・俗字の字形とその所在、つまり頁数と行数とを明らかにするという作業の中で、困った点が一つ出てきた。「新雕大唐三蔵法師取経記」については、具体的な葉数を明らかにできないという点であった。『吉石齋叢書』の影印からは、葉数が、全く読みとれないのである。そこで、1955年文学古籍出版社刊行の『大唐三蔵取経詩話』に「新雕大唐三蔵法師取経記」の影印も附録されていて、洋数字の便宜的な葉数が付けられているので、これを利用すればよいと思った。ところが新しくもう一つ問題が起きた。汲古書院影印の『大唐三蔵取経詩話』は、上・中・下の三巻に分かれ、それぞれに葉数がはっきりと付けられている。しかし、別々に「新雕大唐三蔵法師取経記」を便宜的な洋数字番号で表し、『大唐三蔵取経詩話』の方は汲古書院の正式な漢数字の葉数と表・裏の表記で表していくと、両者が一つの表の中で非常に不統一となることが心配された。そこで苦肉の策であるが、すべて1955年文学古籍出版社刊行の『大唐三蔵取経詩話』の洋数字による葉数表記に統一することにした。「新雕大唐三蔵法師取経記」についてはほかに仕方がないとしても、『大唐三蔵取経詩話』はかなり流通していることであるし、利用者にとって不便となるかもしれない。そこで、汲古書院影印の『大唐三蔵取経詩話』の正式な漢数字の葉数と、文学古籍出版社刊行の『大唐三蔵取経詩話』の仮の葉数との対照表を下に掲げることにした。

次の表は、前半が、汲古閣本の葉数とA（表）・B（裏）の表記である。後半の数字は、1955年文学古籍出版社刊行の『大唐三蔵取経詩話』の対応するページの表記である。

对照表

汲古書院	文学古籍刊行社	汲古書院	文学古籍刊行社
上 - 2 - A	: 9	上 - 2 - B	: 10
上 - 3 - A	: 11	上 - 3 - B	: 12
上 - 4 - A	: 13	上 - 4 - B	: 14
上 - 5 - A	: 15	上 - 5 - B	: 16
上 - 6 - A	: 17	上 - 6 - B	: 18
上 - 7 - A	: 19	上 - 7 - B	: 20
上 - 8 至 11 - A	: 21	上 - 8 至 11 - B	: 22
上 - 12 - A	: 23	上 - 12 - B	: 24
上 - 13 - A	: 25	上 - 13 - B	: 26
上 - 14 - A	: 27	上 - 14 - B	: 28
上 - 15 - A	: 29		
中 - 1 - A	: 31	中 - 1 - B	: 32
中 - 4 - A	: 33	中 - 4 - B	: 34
中 - 5 - A	: 35	中 - 5 - B	: 36
中 - 6 - A	: 37	中 - 6 - B	: 38
中 - 7 至 10 - A	: 39	中 - 7 至 10 - B	: 40
中 - 11 - A	: 41	中 - 11 - B	: 42
中 - 12 - A	: 43	中 - 12 - B	: 44
中 - 13 - A	: 45	中 - 13 - B	: 46
中 - 14 - A	: 47	中 - 14 - B	: 48
中 - 15 - A	: 49	中 - 15 - B	: 50
下 - 1 - A	: 51	下 - 1 - B	: 52
下 - 2 - A	: 53	下 - 2 - B	: 54
下 - 3 - A	: 55	下 - 3 - B	: 56
下 - 4 - A	: 57	下 - 4 - B	: 58
下 - 5 至 10 - A	: 59	下 - 5 至 10 - B	: 60
下 - 11 - A	: 61	下 - 11 - B	: 62
下 - 12 - A	: 63	下 - 12 - B	: 64

中国近世戯曲小説中の異体字研究（4）

下 -13- A	: 65	下 -13- B	: 66
下 -14- A	: 67	下 -14- B	: 68
下 -15- A	: 69	下 -15- B	: 70
下 -16- A	: 71	下 -16- B	: 73

これがあれば、『大唐三蔵取経詩話』の異体字・俗字の所在については、汲古閣本を使おうと、文学古籍社本を使おうと、すぐにわかるものと思われる。「新雕大唐三蔵法師取経記」は、洋数字で79頁から107頁までであり、順番は言うまでもなく『吉石齋叢書』収集本と同じである。棒組の後は行数である。例えば1-1というのは、第1葉の1行目という意味である。

正 楷	俗 字	取 經 記	取經詩話
凡	𠂇	91-7	12-10
丹	𣎵	85-8	25-7
久	夂	85-6	12-6
事	𡵓	91-4	13-10
些	𠂇	90-4	
佛	𣎵	92-10	
	𣎵	93-5	
但	𠂇	81-3	20-6
使	使		23-2
修	修		62-2
	修		67-8
停	停	79-8	18-10
傳	傳		32-9
傷	傷	79-3	18-4
僧	僧	81-1	9-3
優	優	89-4	51-3
兒	兒	82-3	
免	免		17-5
兩	兩	87-7	69-8
再	𠂇	87-9	60-1

中国近世戯曲小説中の異体字研究（4）

	冉		9-6
剗	划		23-3
劒	劒		18-1
幼	幼	98-7	
	幻		62-4
勤	勤	90-6	52-9
危	危	101-9	66-2
卻	却	82-6	22-1
卽	即	80-3	19-6
郷	郷	79-6	19-2
	郷		18-8
参	叅	91-3	53-8
	参		48-9
叉	义	87-1	27-1
受	受	95-5	
度	度		45-8
出	出		27-8
吊	吊		21-7
唇	唇		42-4
商	商	98-6	
問	问	86-6	

喝	喝	88-5	25-10
嗟	嗟	81-5	
啫	啫	100-3	64-3
喪	喪	98-3	
	喪		61-9
善	善	98-2	16-2
嗔	嗔	99-6	63-4
哢	哢		12-9
喫	喫	85-6	
嘆	嘆	81-5	
嘯	嘯		50-2
器	器		65-4
嚴	嚴		59-4
囑	囑	96-9	60-2
國	国	79-7	19-1
園	園		64-8
圖	圖	100-8	64-9
團	團	88-3	28-6
坑	坑	88-8	29-2
垂	垂		12-9
報	報		37-9

場	塲		48-10
定	疋		25-9
宜	冃	81-7	20-10
容	容	96-1	
害	害	18-4	
密	密	97-6	61-4
寧	寧	88-7	
	寧		29-1
實	寔		45-2
寶	宝	97-4	42-2
將	將	82-6	24-1
	將	98-8	24-7
尋	尋	102-9	
尊	尊		13-2
尼	厶	96-9	60-3
崢	崢	80-5	
嶸	嶸	80-5	
嶺	嶺	85-5	
帀	匝	91-9	54-1
師	师		67-4
常	常		25-4

幡	幡	91-4	53-9
年	年	90-9	
幸	幸	96-5	
府	府		70-9
廳	廳	82-3	
發	發		22-1
夢	夢	95-7	
死	死	99-8	
徒	徒	94-2	
從	從	82-4	
	從		64-3
德	德	32-9	
念	念	98-4	36-8
恭	恭	36-3	
忽	忽	91-1	53-4
怪	怪	85-5	
	怪		11-6
急	急	96-9	26-2
性	性	84-8	
恩	恩		34-1
恨	恨	99-6	63-5

中国近世戯曲小説中の異体字研究（4）

悟	悟		25-8
惡	惡	86-5	26-5
悶	悶	93-2	
悽	悽	35-9	
惶	惶	79-1	18-2
惜	惜	96-3	
惱	惱	81-8	
慎	慎	96-4	59-7
慘	慘		25-5
憂	憂	81-3	20-7
憩	憩		40-4
憶	憶	102-8	
懷	懷	97-5	
	懷		41-9
戀	戀		39-9
戰	戰	83-7	27-4
戲	戲		63-2
拜	拜		15-4
指	指	85-9	15-3
採	採	71-7	
授	授	96-2	

換	換	85-1	
揭	揭	97-6	
搖	搖	80-5	19-7
擇	擇		62-8
攝	攝		57-7
攘	攘		17-9
	攘		50-1
收	収	88-6	
	物	99-4	
改	改		10-5
數	数		17-9
斷	断	100-8	40-2
於	於	106-6	71-2
旋	旋		48-6
旨	旨	92-7	
是	是	79-6	
	是		13-10
時	时	92-1	33-4
晚	晚	91-8	38-3
晨	晨		38-3
曉	曉	93-4	35-10

中国近世戯曲小説中の異体字研究（4）

最	最	92-6	
會	會	88-3	15-5
有	有	62-4	
服	服	42-4	
柳	柳	99-7	
	柳		63-6
梁	梁		62-7
棗	棗		48-7
樓	楼	90-10	65-10
榮	荣		62-6
檢	檢		57-3
櫻	櫻		64-8
欲	欲	85-4	25-2
歇	歇	88-6	28-9
此	此	79-2	
歲	歲		11-5
歸	歸	86-2	
	歸	104-5	
	歸		26-2
死	死	99-8	
殘	殘		34-7

	殘		38-7
段	段	103-7	68-4
母	母	37-3	
毫	毫	24-4	
氣	氣	89-6	13-2
流	沝		16-9
淚	淚	94-8	
	泪		60-10
深	深	97-5	33-1
瀾	瀾		46-1
渴	渴	101-6	65-9
湯	湯	91-9	11-4
滑	滑	99-3	63-1
滅	滅	85-4	25-2
滴	滴		70-9
漢	漢		23-6
滿	滿	86-10	26-10
濃	濃		46-3
澆	澆		38-2
瀾	瀾	92-10	
無	无	79-5	13-9

然	𤈦	81-3	18-4
焰	𤈦	25-1	
照	𠂔	85-3	25-1
熱	𤈦		49-1
熟	𤈦		46-10
燒	燒		38-3
爐	𤈦	93-5	56-4
燦	燦	106-8	
爲	𠂔	86-7	
	為		9-7
牌	牌		40-8
物	𠂔	79-3	53-6
牽	牽		57-5
狐	狐	85-5	
狼	狼	17-5	
猛	猛		51-9
猴	𠂔	79-1	
	猴		10-2
獅	獅		18-8
獲	獲		10-5
獼	獼	87-5	

	獅		28-3
環	環	96-2	24-3
爺	爺	104-4	
番	番	92-10	55-7
留	留	88-7	
疏	踈	38-1	
盈	盈	82-7	42-3
盡	尽	79-6	17-5
看	看	87-5	62-9
	看		56-6
眾	衆	79-2	9-7
碎	碎		26-4
禍	禍		10-3
齋	齋	103-4	
	齋	106-8	
	齋		14-3
禱	禱	93-9	
	禱		56-5
稱	稱	101-2	
	稱		14-3
穀	穀		38-9

中国近世戯曲小説中の異体字研究（4）

穩	穩		37-6
	穩		64-5
第	第	100-2	43-10
答	荅		10-10
等	等	97-4	
	等		41-6
箇	个		21-7
管	管		59-6
箇	箇	100-7	
精	精	85-5	27-5
糴	采		35-10
紅	紅	81-2	
約	約	80-3	59-3
納	納		41-9
結	結		45-2
絶	絶	88-6	
經	經	85-4	
	經	83-5	
	經	101-4	
	經		9-6
緑	緑		44-2

線	線		20-5
繞	繞	89-4	
	绕		51-4
緣	缘	95-2	69-1
繡	繡	99-3	48-1
纓	纓		48-1
羅	羅	83-9	12-9
美	美		36-7
聞	闻	85-1	54-7
聰	聰	92-6	
聲	声	93-8	12-4
	声	85-3	65-2
聳	聳		46-4
聽	聽	97-5	
	听		42-10
肉	肉		13-7
背	背		32-1
脊	脊		32-1
腰	腰	85-8	25-7
臉	臉		42-4
臺	臺	91-1	

中国近世戯曲小説中の異体字研究（4）

	臺		41-10
臾	叟		24-4
與	与	98-8	13-4
興	興	95-1	58-2
舉	率	80-6	79-4
	率	97-7	
般	般	99-3	16-2
缸	缸	97-2	60-6
艱	艱	94-6	
花	花		10-1
若	若	86-3	18-4
	若		11-2
荒	莽		35-6
莫	莫		46-5
菩	菩		16-5
萬	万	101-8	9-3
萼	萼		51-4
葉	葉	89-7	51-8
蒙	蒙		33-4
菜	菜	81-6	21-3
蓋	盖	91-4	11-10

薄	薄	96-4	
蓑	蓑	82-2	21-6
蓮	蓮		25-8
薦	薦	98-5	
	薦		34-4
藥	藥	101-2	65-4
藝	藝	93-5	
藍	藍	87-2	27-2
蘿	蘿	89-4	51-4
虎	虎	85-5	27-3
虔	虔	93-7	36-5
處	處	84-3	9-6
號	號	96-6	
	号		16-4
蛇	蛇	79-1	17-5
被	被	81-9	21-3
	被		21-7
裏	里	79-6	17-8
裝	裝	97-9	
術	術	83-6	
要	要		32-1

覓	覓		19-3
覺	覺	95-8	11-6
解	解	102-4	
	解		34-2
計	計		62-6
記	記		61-2
設	設	106-8	
詔	詔	91-10	
誠	誠	84-2	
説	説	80-4	19-6
	説		63-3
謁	謁		40-9
請	請	91-8	70-6
誰	誰	39-6	
諸	諸	105-4	
	諸		70-6
謝	謝	80-8	
	謝		70-2
識	識	91-6	
議	議	99-7	62-2
護	護	94-7	

	護		57-8
讀	讀	99-4	
	讀		63-2
變	变	82-5	21-7
讚	讚		14-3
登	登		35-2
負	負	94-5	57-5
賞	賞		42-1
賢	賢		44-6
赴	赴		41-2
起	起	94-5	19-5
足	足	94-4	
	足		53-3
路	路	79-5	
蹤	蹤	88-6	
蹻	蹻	81-5	38-1
輕	輕	82-7	22-2
轉	轉		35-9
辭	辭	94-5	14-3
農	農		39-1
迎	迎	97-4	

中国近世戯曲小説中の異体字研究（4）

遇	遇	85-2	
過	過	79-7	10-3
適	適		58-10
遊	遊	104-10	73-2
遭	遭		34-6
遙	遙	84-6	15-3
遠	遠	91-9	36-10
遮	遮	98-10	
遲	遲	97-5	60-9
達	達	96-3	
還	還	83-2	15-8
邊	邊		31-10
邇	邇		16-4
那	𠂔	101-6	10-8
	𠂔	99-5	64-8
醉	醉		37-5
鑲	鑲		48-4
閃	閃	96-6	59-9
間	間	86-3	70-2
開	開	88-4	39-1
閨	閨	86-3	

閣	閣	86-3	
陡	陡	84-5	
	陡		56-9
陳	陳		12-10
陰	陰	96-3	59-6
隱	隱		14-8
	隱		26-2
	隱		33-5
雖	虽	79-2	36-7
	虽		18-3
離	离		38-8
雜	雜		17-9
難	難	84-6	9-9
	難	24-3	
霏	霏		25-5
霧	霧		25-5
露	露		47-9
靄	靄	95-10	59-3
靈	靈	86-2	25-1
顏	顏		52-1
願	願		10-9

中国近世戯曲小説中の異体字研究（4）

顯	顯	88-8	
	顯		11-2
風	風	89-8	
飯	飯	81-6	
餐	餐		37-8
養	養	80-6	
饑	飢	101-6	37-9
饌	饌	91-6	
馬	馬		57-5
駕	駕	105-2	70-1
騎	騎		32-1
驚	驚	79-1	18-2
驢	駱	82-3	21-7
骨	骨	85-1	25-8
體	體		16-9
髑	髑		44-3
髑	髑		44-3
高	高		25-10
髮	髮		42-4
髣	髣		50-1
髣	髣		50-1

鬢	髻		44-2
鬣	鬣		31-8
鬪	鬪		32-1
鬼	鬼	96-6	35-1
魂	魂		62-2
魅	魅	85-5	25-4
魔	魔	15-2	
魚	魚	102-10	
	魚		12-9
鮮	鮮		42-4
鳥	鳥	92-8	
鳳	鳳	106-7	59-10
鷄	鷄	81-1	
鷹	鷹		47-8
麟	麟	80-7	19-7
黑	黑		24-2
黛	黛		42-6
點	點	87-1	57-3
鼓	鼓		12-9
齊	齊	91-5	14-9
龍	龍	81-1	

中国近世戯曲小説中の異体字研究（4）

	龍		31-3
	龍		70-9
籠	籠	107-2	